

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	小児在宅医療、レスパイトケアチームとの連携でできること
演者名	紅谷浩之 1) 谷口裕子 1)2)3) 戸泉めぐみ 2)
所属	1) オレンジホームケアクリニック 2) Orange Kids' Care Lab. 3) 地域看護ステーション みかんの木

目的

小児在宅医療では、病気のフォローだけではなく、子ども本人の生活や成長を維持する必要もあり、母親をはじめとした家族のサポートも欠かせない。また、ファミリーライフサイクルの視点から、家族が成長していくことをケアする必要もある。

一方、介護を家族で抱え込んでいる事例も多く、レスパイトケアが必要であるが、子ども側から見たときに「ただ預けられる」ではなく、「楽しく、成長できる」場所であることも望まれることから、在宅医療だけでなく在宅介護、レスパイトケアチームとの連携も不可欠となる。

重度な障害を持ち、医療的なケアが必要な子どものケアに関わるスタッフは、多職種他施設にまたがることが多く、連携は困難なことが多いが、上記のようにその連携によりもたらされる効果も大きいと考え、連携協働を実践した。

実践内容

重度心身障害児レスパイトケア施設（通所施設）を在宅チーム（訪問診療チーム＋訪問看護チーム）と一体的に運用することで、訪問診療や訪問看護時に訪れる看護師が通所時もケアを行うことができる体制を作った。また、通所施設所属の介護職や保育士が、必要時には診療や訪問看護にも同行することで、通所時に行っているケアを家族や医師とも共有することができた。

また、施設合同で（クリニック・訪問看護ステーション・通所施設）カンファレンスを定期的に行うことで課題や目標の共有も可能にした。

実践効果

医師は病状の変化だけでなく、成長による変化や家族の障害受容や将来の目標についての変化にも気づくことが多くできるようになった。

通所施設スタッフは、医療的ケアが必要な児が、診療時に医師や看護師からどのような指導やアドバイスを受けているのかを知ることができた。

考察

病気だけでなく、生活・成長にも関わるスタッフが濃密に連携することで、患児・家族を多面的に評価し、サポートすることが可能であることを関わっている多職種全員が実感している。